

〔特別展によせて〕

神々と仏との出会い

この特別展では、その副題に見られます通り、アジアの古典的仏教彫刻の源流と見なされるものに主眼を置いて、国内の優れたコレクションの中から、作品を選ばせていただきました。その結果、いづれも、紀元2世紀から5世紀に含まれるもので、神像・仏像・如来像・菩薩像・供養者などに分けられました。

ガンダーラ彫刻は、仏像図を表わしたものが主流である、と言われますが、ギリシア以来の神々の像も、質・量共に秀れたものがあります。しかも、それらが、インド系・イラン系、また、土着の神々と混然と融合しており、更に、極東の彫刻の源流ともなる、仏像との関連性を秘めている点は、まさに興味がそそられます。

アトラス神は若々しい青年の像として(図1)、また、時には、有鬚の壮年として表わされますが、いづれも、頭上に大地を支える役目を負わされて以来、立て膝の逞しい坐像となり、天空を自由に飛翔していた名残りの羽が、まだまだ力強さを失っていません。この神は決して卑屈な表現を見せず、じっとその運命に耐えているようです。



図1 アトラス神像 東博蔵

同様な姿勢を取る力士像も、あるいは、後に、極東の美術において、執金剛神となるバジュラパーニーとも、アトラス神とも見えます。羽は見えませんが、まことに、勇猛な姿であり、その髪や顔の表現、体軀のモデリング(立体的表現)には全く無駄がなく、引き締まり、気品と風格のあるその態度は、ギリシア彫刻そのものを見るような気がします。解剖学的な肉体把握の正確さを、そこに見ます。

樹下にバジュラ(金剛杵)を持って、もう一方の手を額にかざして立つバジュラパーニー(執金剛神、図2)の、逞しくも、見る者に緊張を感じさせないリラックスした姿は、まことに魅力的です。これが、わが国の執金剛神に至ると緊張感溢れる像に変身したし、頭髪も、ここに見るような自然体ではなく、頭上に髻を結った形式の中に収められて行きます。

このバジュラパーニーの脇に豪華な飾りをつけ、敬虔に供養のものを持つ女性供養者(図3)の像は、精神的にも、肉体的にも充実しており、隣り合った神の像に、精神的に随分近づいています。この彫刻は、大きな群像の、右側に仏を



図2 執金剛神と女性供養者像



図3 竜女をさらう鷲 東博蔵

配するシーンの一部ということですが、本当に釣合の取れた執金剛神と女性供養者を見ますと、これは偶然のことではなく、彫刻家は、確かに、群像中の何げなく隣り合った人々(ここでは一方は神であります)の釣合いにも、充分、気を配ったことが分かります。また、この、神に近づいた女性像の、頭髪正面のアーモンド型は、如来像の同じ部分にも見られます。

鷲に変身したガニューメデス神が竜女を誘拐する、ドラマチックな場面の表現では、残念ながら鷲の頭部は失われていますが、その羽の恐ろしさと、竜女のインド的な衣裳や官能的な肉体表現に目を奪われ、ここにギリシア神とインド神との分かり易い融合を見ます。このモチーフは、二つの作品に見られますが、その内一つ(図3)は、仏像の内の菩薩の頭を飾ったと言われるもので、大分大きな菩薩像の頭飾として、このような、ギリシアとインドの融合的モチーフが、仏像に取り入れられていることに、ガンダーラ人の逞しさと柔軟さを理解します。

女神像そのものを主人公とした作品も、男神像の彫塑性に負けてはいません。勝利の神のニケは、ここでは、ふっくらとした顔立ちの愛らしい乙女のようにあります。

コルヌコピア(豊稔の角)を持ったアルドクショー女神はイラン系の神と言われ、まことに魅惑的な姿態でたえず、同時に、生産につながる性的なものも暗示していることが分かります。この女神



図4 ハーリティー像 東博蔵

の風貌は、ギリシアからもイランからも離れ、正にガンダーラの(あるいはアフガニスタン)女性の顔立ちであるかも知れません。このアルドクショー神は、矢張りイラン系の、財布を持つファロー男神とペアーで坐し、それぞれ生産と富を象徴し、経済の二本の柱を示すものです。

同じようにペアーで表わされるのがハーリティーとパーンチカですが、こちらはインド神であります。ハーリティー女神は、元、子供を喰う悪鬼であったのが、仏に500人の内の最愛の子供を隠されたことから、自分の罪を恥じて改心し、子供を守る神になったと言われるものです。日本では訶梨帝母(鬼子母神)として表わされます。パーンチカはファロー神と同じように財布を持っており、両者合わせて、ここでも生産と富を示します。ハーリティーはアルドクショー神と同様に単独でも表現され(図4)、慈愛に溢れた豊かな像となっています。

インド本来のヤクシー女神は樹精として樹の枝につかまった姿の他、イラン系の衣裳を着て、わが国の仏像にも見られる三曲法に体軀をくねらせ、天衣を肩からかけて立っています。内、一点は、仏像と同じ蓮台に乗っているという具合です。

このような、本来、抽象的な意味づけをされた神々は、後に、実在の人である釈迦の伝記を中心とする仏教美術の中に、巧みに取り入れられ融合して行きます。(村田靖子)